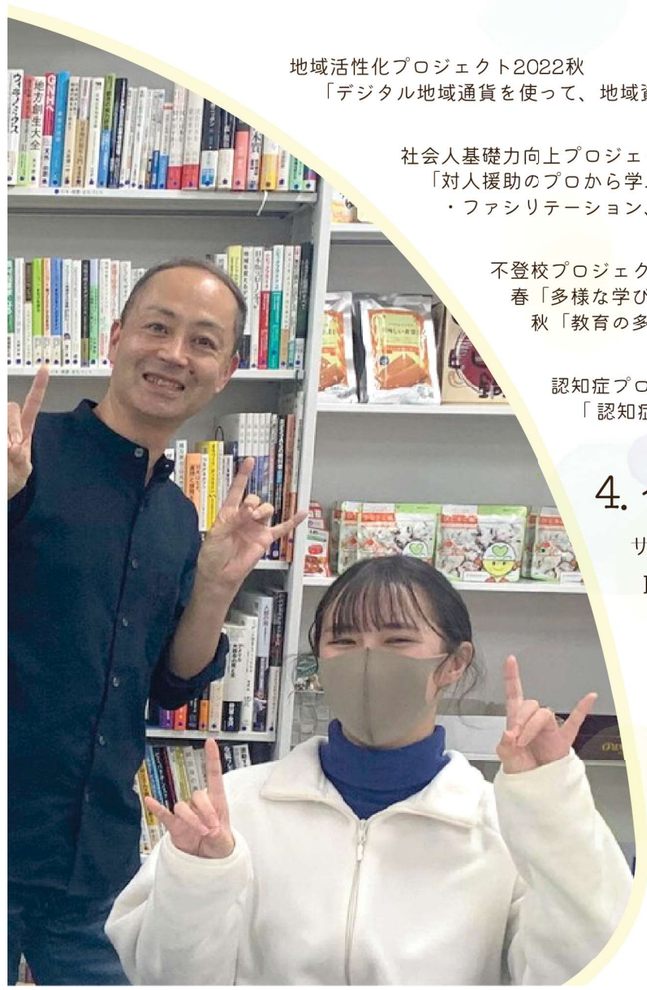
REPORT 2022

地域連携教育推進室

SHIGA UNIVERSITY

伸びる

2022年度は「伸びる」年。大学生たちにも活気が戻った一年でした。日本を離れ世界に向かう学生、離島の生活を体感しに行く学生、滋賀や彦根で新たな繋がりを広げる学生、心も身体も大きく伸ばしていく彼ら・彼女らの姿がたくさん見られました。
大学内の障害者アート展は、大学という施設の新たな伸びしろの発見でした。湖東地域の障害者支援施設さんとのコラボで、大学の日常に芸術作品が出現。開かれた場所として大学の可能性を伸ばすことができました。今年大きく伸びた学生自身の活動、地域と連携した活動がこれからもすくすくと伸び、ますます大きな花を咲かせることが待ち遠しいです。



contents

1. はじめに ・・・・・・・・・・・・・ 3P
地域連携教育推進室の運営体制

2. 地域連携教育推進室の紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5P

3. プロジェクト科目

モノづくりプロジェクト2022春
「思わず欲しくなる自助具を作ろう」・・・・ 7P

社会人基礎力向上プロジェクト2022春
「対話と表現力を鍛える」・・・・・・・・・・・・・ 8P

社会人基礎力向上プロジェクト2022春
「人形劇から学ぶ企画構成力・表現力」・・・ 9P

SDGsプロジェクト2022
春「SDGs理解と私のアクション」・・・・・・・・・ 10P
秋「SDGsの探求と実践－持続可能な社会づくりに向けて」

PBL型インターンシップ2022夏休み ・・・・ 11P

市議会議員インターンシップ2022夏・・・・・・・・ 12P

企業連携プロジェクト2022夏休み
「高校生の地域活性化アイデアをカタチに」・・ 13P

働き方探求プロジェクト2022秋
「協同労働とまちづくりの実践事例を学ぶ」・・・・ 14P

地域活性化プロジェクト2022秋
「デジタル地域通貨を使って、地域資本主義を実践してみよう」・・・・・・・・・・・ 15P

社会人基礎力向上プロジェクト2022秋
「対人援助のプロから学ぶコミュニケーション・・・・・・・・・・・・・・・・ 16P
・ファシリテーション、アセスメントのスキル」

不登校プロジェクト2022
春「多様な学びのあり方を学び、居場所づくりを考えよう」・・・ 17P
秋「教育の多様性を学び、議論しよう」

認知症プロジェクト2022秋
「 認知症をめぐる共生社会構築のためのプロジェクト」・・ 18P

4. イベント
リステナウィーク2022・・・・・・・・・・・・ 19P
People's Pantry ・・・・・・・・・・・・・・・ 23P

5. 学生の自主活動 ・・・・・・ 25P

6. 新聞掲載・・・・・・・・・・・・・ 26P

7. 協力企業・団体の皆様
・・・・・・・・・ 27P

1 地域連携教育推進室の紹介

IoT（Internet of Things）やAI（ArtificialIntelligence）の発達にともない、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させ、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society 5.0）の実現が求められています。

滋賀大学でも2017年に日本初のデータサイエンス学部が設置され、文理融合の教育が推進強化されることになりました。地域連携教育推進室では、学生と地域（フィジカルな現実空間）をつなぐことによって、その基盤を提供しています。具体的には、経済学部やデータサイエンス学部で提供されているサイエンス、技術、エンジニアリング、数学（STEM）の授業に加えて、PBL（ProjectあるいはPlace Based Learning と呼ばれる）型授業、インターンシップ、ボランティア体験のほか、インフォグラフィックスや映像表現などの芸術（Art）的要素なども学ぶことで、文理融合型のSTEAM 教育の完成を目指しています。

そもそも地域連携教育推進室の教育の源流は、2008年に始まったサービス・イノベーション人材育成支援事業（以下、SI事業）にあります。この事業の題目は「公共的な対話と知的共同作業をベースにイノベーティブな『心の習慣』と「イノベーション評価能力」を養成し、地域的競争力の強化にコミットメントする中核的人材育成事業」と極めて長いものでしたが、改めてこの題目を眺めてみると、現在の地域連携教育推進室の姿と重なるものがあります。日常的に学生が集い、地域の課題などについて対話を重ねながら、地域に出ていく姿はまさにこの長いタイトルそのものなのです。

映像制作を教育ツールとして活用しはじめたのもこのSI事業でした。当時はまだ「経済学部なのになぜ映像制作なのか」という疑問の声もありましたが、取材・構成・編集という一連の作業の中で、課題発見能力、課題解決能力、プレゼンテーション能力といった社会人基礎力の中核となる力をつけるのに有効でした。

2010年には就業力育成支援事業が始まりました。本学の取り組みは「複眼的フィードバックによる就業力育成」と題されました。PBL型授業や映像制作などの取り組みを継続しながら、学生自身が、自分自身や企業（職業）を複眼的に眺めることによって、客観的かつ主体的な分析を行えるようにするために、学生自らが企業研究を行い、面接官として質問事項などを考え、実際に面接をおこなう「複眼的模擬面接」なども実施しました。

2012年からは、文部科学省「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業【テーマA】（2012-2014年）」の助成を受けて、滋賀・京都・奈良の16大学の連携事業（「滋京奈地区を中心とした地域社会の発展を担う人材育成」事業）に発展をしました。この取組では、地元の企業、経済団体、地域の団体や自治体等と産学協働連携協議会を設置して、そのもとにインターンシップ、PBL、キャリア形成、産業界連携という4つのテーマ部会を設けて，産業界（社会）のニーズに対応し，社会的・職業的にも自立した人材の育成に向けた教育の充実を図りました。さらに2014年からは、11大学と連携をして、文部科学省「インターンシップ等の取組拡大【テーマB】(2014-2015年)」の助成を受けて、更なるインターシップの質的・量的拡大に取り組んできました。

地域連携教育推進室は、いわゆる就職活動が解禁になった際に行われる従来型の就職支援ではなく、1回生～2回生の早い時期から卒業にいたるまで継続的に「社会人基礎力」の育成をはかり、その発展としてアントレプレナーシップの体得を目的としています。本室のプログラムは、大きく3つに分けることができます。

① PBL（Project Based Learning）科目
地域社会やNPOを含む企業が実際に直面している課題を学生と共有し、地域社会や企業と学生が共同で解決していく活動を通じて、社会人基礎力やアントレプレナーシップを育成する科目です。

② プロジェクト型インターシップ
地域連携教育推進室では、企業等の課題解決やプロジェクトに中長期間にわたり取り組む、プロジェクト型インターンシッププログラムを提供しています。SDGsや企業経営をテーマに座学で得た知識を深めます。

③ ボランティアプログラム
本学の学生たちが主体となって、地域社会や企業の課題を発見し、地域の方々と一緒に課題の解決を図っています。このプログラムは単位もなく、また就職に直結する活動ではありません。学生の自主性を最も養うものです。

本学では、以上の系統に沿った様々なプログラムを地域の自治体や企業、NPOと広く連携し、開発することで学生の「社会人基礎力」の育成とアントレプレナーシップの体得に取り組んでいます。

学生の「社会人基礎力」を育成していくためには、従来型の大学での講義ももちろん大切ですが、地域連携教育推進室を中心とした実践型・問題解決型で、地域社会に開かれた教育プログラムも大切なのです。

今年は、新型コロナのある生活が日常になり、大学生たちの生活にも活気が戻った一年でした。長期休みを利用して海外へ出向いたり、国内各地を歩く者、一年間の留学をする者や休学をしてこれからのライフスタイルを考える者など、アクティブな学生たちの姿がたくさん見られました。

地域活動でも同様に、フードバンクや学習支援など大学生の持ち味を存分に活かしてくれました。近隣のデイサービスとのコラボを実現し、高齢者さんが大学構内で散歩をしたり、高齢者さんが制作した新聞紙のバッグを大学に提供していただいたりすることもありました。大学生たちのこれらの活動は、昨年芽吹いたもので、今年はそれが大きく伸びる一年になったと感じます。

さらには、湖東地域の障害者支援施設さんとの共催で「街かどアート滋賀大交差展」が開催できたことも意義深いです。大学という日常に芸術作品が出現したからです。特別なイベントよりも、何気ない日常の毎日見る景色の中に溶け込むアートは、大学生らの心にも沁みたのではないでしょうか。

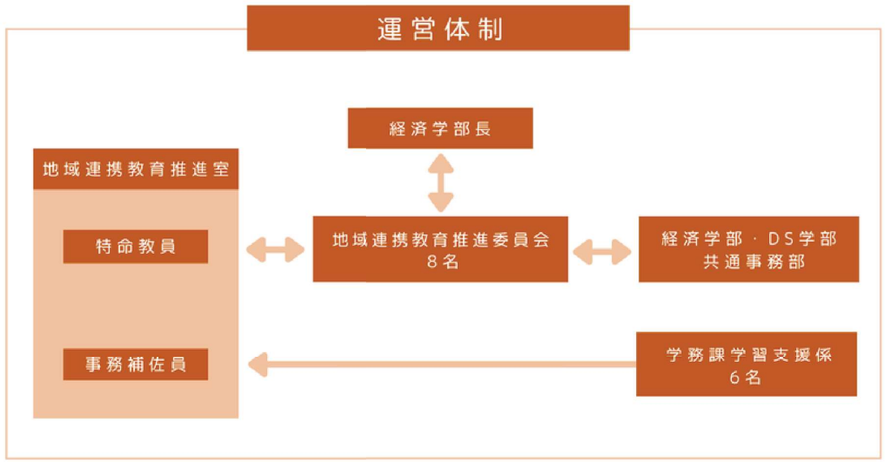
培った実践力や課題解決力を活かして、今年大きく伸びた学生自身の活動、地域と連携した活動がこれからもすくすくと伸び、大きな花を咲かせることが今から待ち遠しいです。

（地域連携教育推進室長）

地域連携教育推進室の運営体制

今年度の地域連携教育推進室は、特命教員と事務補佐員の体制で日常業務にあたりました。年度計画の策定や進捗管理については、地域連携教育推進委員会において適宜協議しながら、事業の執行を行っています。

2019年4月には、社会と大学との新しい関係を構築、深化させ、産学公連携を更に積極的に推進するべく、全学組織として「産学公連携推進機構」が新たに設置されました。地域連携教育推進室も、この新たな機構との連携・協力も進めています。



2 地域連携教育推進室の紹介

地域連携教育推進室は彦根キャンパスの校舎棟３Ｆにあり、学習スペースや図書の貸出、People's Pantry ・みんなの食品庫などを行っています。授業の合間に立ち寄れる空間なので、学生同士の交流も生まれています。

この推進室には担当の教員とスタッフがいて、地域と連携する教育プログラムを行っています。例えば、企業や行政の方々と地域課題の解決に取り組むプロジェクト科目の提供やインターンシップ、ボランティアなど様々な機会を提供しています。

スタッフ紹介

柴田 雅美　室長／教育・学生支援機構　特命教授

この部屋にさまよいに来てください。そして、偶然の出会いを楽しんでください。
彦根歴45 年。彦根のことで困ったらなんでも相談にのります。子ども食堂や学習支援をしているNPO 法人代表理事でもあります。
地域活動・ボランティア活動の紹介もします。

土田 梨絵（事務補佐員）

私は月～金曜日まで地域連携教育推進室のお部屋にいます！学生のみなさんとお話したり、相談にのったりと日々の繋がりを大切にしています。図書貸出や現在開催しているフードパントリーの受付もしていますので分からないことがあれば何でも聞いてくださいね。いつでもお待ちしています。

地域連携教育推進委員会

竹中 厚雄　准教授／地域連携教育推進委員長
真鍋 晶子　教授
横山 幸司　教授
榎本 雅之　准教授
田村 あずみ　国際交流機構　准教授
入江 直樹　教育・学生支援機構　特命教授

書籍貸出事業

地域連携教育推進室内に、大学図書館とは別の独自の図書室を開設し、貸出も行っています。教員の選書や学生のリクエストなどをもとに、自己啓発や生き方をテーマにしたものから企業経営に関わるものまで幅広いテーマを扱っています。考え、行動するためにも、多くのインプットをしてください。

時間：9:30 ～ 12:00, 13:00 ～ 16:30（平日） 貸出期間：1 人1 冊　2 週間以内

People's Pantry 事業

地域連携教育推進室には、People's Pantry ・みんなの食品庫を設置しています。教職員や地元のフードバンクや農家からいただいた食品や野菜などを学生に配布しています。 時間：9:30 ～ 12:00, 13:00 ～ 16:30（平日）

相談事業

リラックスした雰囲気のある地域連携教育推進室では、教員や職員との距離が近いことから、学生の日常生活や学業に関する相談にも対応しています。People's Pantry・ みんなの食品庫を定期的に利用する学生にも積極的に声がけを行い、学生ニーズの掘り起こしから相談に繋げることも多いです。

情報発信事業

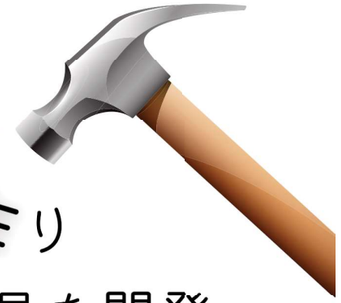
学生へのタイムリーな情報伝達として公式LINEやFacebookなどのSNSを使った情報発信に取り組んでいます。現在、公式LINEの登録者は293名です。プロジェクト科目などの案内やPeople's Pantry ・みんなの食品庫の食品の入荷状況、地域のボランティアやイベントなどの情報を定期的に発信しています。

3 プロジェクト科目

プロジェクト科目は、経済学部・データサイエンス学部の正課の授業プログラムの一つで、学科や学年を超えて、少人数で協力しながら、専門分野のスキルアップや地域課題の課題など特定のテーマに取り組むものです。自ら考え行動できる力などのアントレプレナーシップの涵養も目指します。

モノづくりプロジェクト2022春
「思わず欲しくなる自助具を作ろう」

期　　間：2022/4/6－7/20
履修者数：18名
担当教員：柴田 雅美



自分の手でゼロからのモノ作り
ー学生らしい着眼点で自助具を開発

このプロジェクト科目は、アナログの手法にこだわったモノづくりのプログラムです。実際に手を動かしモノづくりをすることで、手や指、皮膚の感覚を呼び起こし、自身のもつ身体感覚を再確認することをねらいとしました。また、そのプロセスでは、チームワークや企画構成する力、作り上げる力などのいわゆる社会人基礎力の向上も期待しています。

授業では彦根市内のボランティアグループ「自助具開発工房」さんの協力を得て、自助具の構想から制作までを行いました。まず最初に、グループ代表の黒澤 博さんを授業に招き、現役時代のモノづくり現場の経験やモノづくりの考え方を学びました。その後、実際のモノづくりでは、18人の学生らは、自分の構想をもとに８つのグループにわかれ制作に着手。中学校以来使ったことがないドリルやノコギリの記憶を辿りながら「家の中に現れた虫を捕獲する道具」「補聴器」「認知症予防の木製ゲーム」「目の不自由な方も楽しめるゲーム」「片手でも開けられるペットボトルキャップオープナー」「リモコンホルダー」「折り畳み机」などを完成させました。

このプログラムの目的は、実際に手を使い作り出す感覚を経験することや、試作を繰り返してPDCAサイクルを学ぶこと、そして、共同作業を通じてチームワークの能力を向上させることの３つでしたが、十分に目的を達成できた内容になりました。さらにデザインの意味について考えたり、工作用道具の使い方を学べたことも意義がありました。

作成した自助具の完成発表会を、令和4年7月20日水曜日に、彦根市北老人福祉センターハピネスで開催しました。グループごとに制作物や制作の動機を紹介し、参加者には手にとって使い勝手を確認していただきました。参加者からは、「目の不自由な方でもできるゲームが面白かった」「学生さんたちの眼のつけどころが素晴らしいと感心した」「アイデアを具体的に形にしていく過程で様々な苦労や工夫を重ねて、対象となる方々への理解も深まっていただろうと思い、なんて素敵な取り組みなのだろうとあらためて感激しました」などのたくさんの感想を得ました。

来季に向けて

この授業では自分の手を使い、五感の感覚を活かしたリアルなモノづくりができたし、身近にあるあらゆるモノやデザインの意味合いも考える機会になったことも意義深い。デジタル機器を使ってデジタルな制作物を作ることが多い時代にあって、継続していきたいプログラムです。

社会人基礎力向上プロジェクト2022春
「対話と表現力を鍛える」

期　　間：2022/4/11－7/18
履修者数：15名
担当教員：柴田 雅美

目覚める、対話と表現の力

このプロジェクト科目は社会人基礎力の向上、特に、対話と表現力の向上を目的に開講しました。社会人基礎力とは「考え抜く力」「チームワーク」「前に踏み出す力」など経済産業省が提唱しているものです。今回、その中でも特に「対話する力」と「表現する力」に着目したことには理由があります。

まず「対話する力」についてです。生産性や合理化・効率化が重視されてきた社会にあって、いかに省力化するか、早く正解にたどりつくかが大事にされてきました。しかし、VUCA時代と呼ばれ因果関係が不明で前例のない出来事が増えていく時代になり、課題解決の正解ではなく、納得解を見つけ出していく力が求められるようになりました。その力のコアを「対話する力」と考え、そのスキル向上を計りました。

次に「表現する力」についてです。学生の中には、自分は対人コミュニケーションが得意でない、いわゆる「コミュ障だ」という人が少なくありません。また一方で、プレゼンスキルが大事だとばかりに、パソコンやITを使ったスキルばかりに注目する学生も多く見られます。そこで、ここではプレゼンの下地になる「何をどう伝えるか」に着目をし、伝えるための顔や手振り、身振りなどといった身体による表現をトレーニングしました。

具体的には対話する力のトレーニングとしてPCAGIP（ピカジップ）の手法を取り入れました。これは対話による課題解決を図る手法です。学生の中から話題提供者を選び、残りの学生は短く質問をします。話題提供者は質問に一問一答で応えていくことを繰り返すもので、平均して50個ぐらいの質問が投げかけられます。話題提供者は多角的な問いを受け、自らの考えを巡らせたりします。質問者側も発問を通して考えを深めることができます。副次的にこのPCAGIPワークショップを繰り返し行うことで履修学生の間に温かい空気感や繋がりが生まれたようにも思います。

さらに学期の後半は表現する力のトレーニングを行いました。インプロビゼーションコミュニケーションのワークショップで言葉で伝えたり、体で伝える即興劇を実施しました。イエスアンド、昔話作り、一枚の紙を使った即興劇などを行いました。前半にPCAGIPで関係性のできた学生たちは、初めての即興的にもあまり躊躇することなく取り組めたようです。

来季に向けて

授業のワークを通じて学生らは表現し、対話を始めた。普段は挨拶だけの友達（よっ友と言うらしい）だったり、授業で少し話すだけの友達ばかりで、対話できる友達が欲しいそうだ。私たちは日常、何らかのコミュニケーションをしていますが、たいていは特に意識することのない範囲でやっています。そこに、意識的に、意図的に、日常とは異なる刺激を与えることで、もともと持っている表現や対話の力を表に出してこようとしています。来季も続けていきたい授業です。

社会人基礎力向上プロジェクト2022春
「人形劇から学ぶ企画構成力・表現力」

期　　間：2022/4/12－7/19
履修者数：10名
担当教員：柴田 雅美

自作自演の人形劇公演に初挑戦！

このプロジェクト科目は、社会人基礎力の向上、特に、チームワーク、企画構成力と表現力の向上を目的に開講しました。プログラムの実施にあたっては、市内で30年の歴史を持つ人形劇グループ我楽多（がらくた）さんの協力を得て、人形劇の実演を通じ、臨機応変な対応力の向上と、観客に見てもらい伝えるための構成力を向上させました。

授業では実際に、人形劇を中心にした一連のパフォーマンス（オープニングから前座のイベント、本番の劇、クロージング）を企画し公演として実演しました。もちろん、劇のストーリーや登場キャラクターもチームごとに自作です。

学生らは、まず人形劇グループ我楽多さんの実演を鑑賞しました。専用のステージを組み、演じられるストーリーや声色、テンポに、いつか見た懐かしさと楽しさを感じ、これを自分たちでやるんだ、という気持ちを高めることができました。

学生に人形劇のテーマを募集したところ２つのテーマに決定し、それぞれに分かれて進めました。一つ目は「ゴリラくんのおてがみ」　仲良しのゴリラくんとうさぎさんがあることが原因で仲違い。手紙を通じて仲直りします。分け合うことの大切さがテーマです。２つ目は、「飛べないとり物語－仲間との成長」小さくて飛べないスズメのピスカが、親や仲間の鳥たちに励まされて練習し、飛べるようになるストーリー。仲間との成長がテーマです。

授業では、我楽多さんの指導をいただきながら登場キャラクターの設定とシナリオ作成を行い、演技指導を受けながら何度もリハーサルを重ね、本番公演に挑みました。本番の公演は、令和４年7月12日（火）に、市内ボランティア団体のHot Hot ～ほどほど～さんの協力のもと、彦根市北老人福祉センターハピネスで開催され、子どもと保護者ら23人の参加がありました。観客は、学生らが想定していたよりも小さい子どもたちが多く、セリフや言い回しが伝わるのかどうかにハラハラしながら、また、子どもたちの遠慮のない反応に一喜一憂しながらの公演となりました。

授業で初めて顔合わせをした学年も異なる学生たちが、意見をすり合わせ、ゼロから作り上げる難しさと楽しさを経験できたようです。授業のねらいであった社会人基礎力、特に「チームワーク」と「表現力」を向上し実践できること。アナログに自分の手を使って作り出す感覚を得ること。試行錯誤を繰り返して、作り上げる感覚を得ること。楽しませたり、感動させたり（＝伝わる）ための企画構成力を向上させることは全て達成できました。

来季に向けて

今回の授業企画にあたり意識したことは、学生と地域の市民活動・ボランティアグループの双方に意味のある取り組みにすることでした。そのために、地域のグループの活動の中にある様々なスキルに注目し、それを学生の学びの教材とすることと、グループに大学生が関わることで活動への刺激としてもらうことを意識しました。結果的に良い取り組みになったと思います。次年度も引き続き開講したいプログラムです。

SDGsプロジェクト2022
春「SDGs理解と私のアクション」
秋「SDGsの探求と実践－持続可能な社会づくりに向けて」

期　　間：春 2022/4/14－7/28　秋 2022/10/6－12/1
履修者数：春 9名　秋 6名
担当教員：柴田 雅美

SDGs、その先に何があるんだろう？

SDGsプロジェクトとして、持続可能な社会のために課題を発見・探求し、解決に向け実践できる資質を向上させることをねらいとしています。春学期のプログラムは、脱プラスチックからスタートして「ゴミ」や「捨てる・捨てない」ことについて考え、実践しました。映画「マイクロプラスチックストーリー」の視聴やSDGsワークショップなどを行い、My SDGsアクションを実践するプログラムとしました。秋学期のプログラムは、SDGsの１７ゴールと１６９のターゲットを俯瞰し、自分の興味関心のあるテーマを探求し、その成果を発信することとしました。

プログラムを通して、持続可能な社会の実現に向けて「社会のなかの私」の視点を獲得したり、アントレプレナーシップを涵養するなど、SDGsマインドを持つ経済人として活躍できる人材育成につながっていくことを期待しました。

春学期の具体的な内容は、映画「マイクロプラスチックストーリー」を視聴し、その内容からなぜ SDGsが必要なのかを議論しました。エシカルコンシェルジュの風かおるさんを講師に2030SDGsカードゲームを体験。そのプロセスを通じて、"SDGsマイアクション"を考えました。学生からは、自分で採取し調理した昆虫食を食べるプロジェクト、琵琶湖のブラックバスを釣って食べるプロジェクト、琵琶湖の湖岸に落ちているゴミを拾ってアート作品を作るプロジェクトの３つが提案され、それぞれ実践を行いました。授業の最終日には、活動の経験を振り返り、Sustainableのその先にあるものを考え、議論しました。

また、秋学期では、SDGs自体を理解することからスタートし、「SDGsとは一体何か？」「１７のゴールと１６９の指標の理解と対話」を繰り返し、SDGsの表面的な理解を一歩進めて、関心のあるゴールとその下の指標を読み込み議論しました。授業を「哲学対話」的な進め方で行い、「これからの働き方、生き方」「しあわせとは」などのテーマで、考えを多様化すると同時に深めていきました。さらに、大学内のサステナウィークイベントと連動し、授業の実践報告として「愛と恋」をテーマにアンケート調査と哲学対話を行いました。

SDGs自体は中学校や高校で学ぶ機会が増えてきた学生にとって、わかりやすいSDGsから一歩進めて、国連が何を定め、何をしようとしているのか、そのことを俯瞰し探求することができました。SDGsやサステナビリティをより自分ごととすることができたのではないでしょうか。

来季に向けて

SDGsやサステナビリティをテーマに４年にわたりプロジェクト科目を実施してきました。年を追うごとに学校や社会でSDGsを取り上げる機会が増え、SDGsに対する学生の認知は進んでいるようです。来期のこの科目の持続性を考えるとき、次に何をテーマに据えていくのがよいか考えるタイミングにきているようにも思います。持続可能な社会づくりにつながる何かを考えてみたいと思います。

捕まえたセミの幼虫を油で揚げる様子

釣ったブラックバスを捌いている様子

ブラックバスフライのバーガー

PBL型インターンシップ2022夏休み

期　　間：2022/8/10－2022/9/29
履修者数：15名
担当教員：柴田 雅美

大学生初の夏休みを インターンに懸けました！

本科目は地元企業や団体のプロジェクトをテーマに課題解決や企画提案を実践するインターンシッププログラムです。経営の現場で、実際の経営上のプロジェクトに取り組むことで、経営者目線とはどんなものかを学ぶとともに、働き方について考えたり、社会との関わり方を学ぶこともねらいとしました。

今回、学生が取り組んだテーマは次の通りです。

- インスタグラムを使ったSNSマーケティング
- 福祉の仕事のイメージチェンジを考える
- 新しいWebサービスの企画構築
- 工場からの食品残渣の資源化と活用
- 魅力的な商品開発と新しい営業方法の検討
- 仕事と子育ての両立を考えた働き方改革
- 新しい働き方や求人・求職の取り組み
- 自動販売機を使った商品開発＆発信
- 地域スーパーの新たな地域貢献のタネを考える
- 市場調査をして効果的なSNS発信や ホームページ更新による自社ブランディング
- アフターコロナを見据えた飲食業界における インバウンドを含む観光メニュー開発

プログラムは、大学生の夏季休業期間に行いました。8月10日にプロジェクトの進め方や学生自身の目標設定などを行う事前学習を行い、8月11日から9月28日に各企業で活動に取り組みました。その成果報告として9月29日に彦根キャンパスで成果報告会を開催しました。

活動の一例をあげると、日世株式会社と株式会社あいふぁーむHIKIDAのテーマに取り組んだ経済学部１回生の学生は、地域循環サイクルを広めることを目的に活動を行い、規格外の野菜(小松菜)を使ったソフトクリームを企画し、実際に販売も行うことができました。「部活動やアルバイトとインターン。大学生になっての初めての夏休みがどこかにいきました・・・。」と学生は洩らしていましたが・・・。それほどに充実した取り組みになったようです。

来季に向けて

今回も彦根商工会議所青年部有志をはじめ、地域の企業様・団体様の協力を得てプロジェクト型インターンシッププログラムを実施できました。大学生にとっては、身近な場所でありながら、経営最前線で企業のプログラムに関わることができる絶好の機会になっています。来期においても、リアルが学べるプログラムとして継続していきたいと考えています。

市議会議員インターンシップ2022夏

期　　間：2022/8/10－2022/9/29
履修者数：9名
担当教員：柴田 雅美

彦根市議会の連携による 初の議員インターンシップを実施

本科目は地域実践型PBL学習の一環として彦根市議会や議員の活動を体験するプログラムです。彦根市議会と本学の連携協定による事業の１つで、インターンシップは初めての取り組みでした。

具体的な議員の活動体験を通じて、地域づくりと地方政治の最前線に触れたり、行政の仕事を公務員とは異なる視点で見ることを期待していました。また、学生が将来の進路選択の視野を広げる機会を得ることもねらいとしました。

今回は、市議会議員５人に対して経済学部の2年生から４年生の9人の学生が参加しました。具体的な活動期間は8月10日から9月29日で、市議会や議会事務局、市役所の仕事を学んだあと、市議会議員の活動として住民要望のヒアリングや地域イベントなどに参加したり、9月議会への個人質問に関する調査や資料作成に関わりました。

参加した学生からは次の感想がありました。
議員さんの『議員は私にとって天職やと思ってます』の言葉が鮮明に残っています。本当に議員さんが近く感じられました。本来ならば、議会傍聴やイベントに行かなければ容易に会うことが出来ない議員さんに、何度も会い、何度も会話をし、何度も交流ができたことは本当に財産です。

地域のイベントや地域振興のための取り組みを実際に体験、また観光産業にどう携わっているのか触れることができたことに非常に満足しています。彦根市の市政に関わる皆様の彦根市をよりよい街にしたいという熱意が伝わってきました。

来季に向けて

市議会と本学の連携協定によるプログラムは、より議員活動に近づいてもらい、学生の目線で地域について考えたり、提案できるインターンシップとしての実施でした。議員さんにとっても初のインターンシップではありましたが、取り組みに工夫をしていただき、学びの多い機会をいただきました。初年度の成果を受け、もう少し規模を広げて実施できればと考えています。

企業連携プロジェクト2022夏休み
「高校生の地域活性化アイデアをカタチに」

期　　間：2022/8/22－2022/8/25
履修者数：18名
担当教員：柴田 雅美

企業人から学ぶ 企画実現のイロハ

このプロジェクト科目は、滋賀大学と平和堂・キリンビール・ブリヂストン（以下、HKBとする）との連携協定に基づく産学連携プログラムとして実施しました。HKBが主催する「彦根の熱き高校生の街おこしの夢を応援！熱き高校生の地域活動支援」により市内高校生が考えたアイデアの実現化に向け大学生が取り組むものです。

今年度は市内高校生から128件のアイデアが提案され、審査を経て４つのアイデアが選ばれました。8月22日～25日の夏季集中授業では大学生とアイデアを考えた高校生が４チームに分かれ、具体化に取り組みました。アイデアを実現するプランを考える上で、HKBの企業人によるコーチングを取り入れるなどをしながら企画を練り上げました。授業最終日には４チームによる最終プレゼンテーションの結果、「彦根かるたで街おこし」を最優秀賞に決定しました。

彦根かるたと、それを使ったまち歩きを通して、彦根の魅力的なスポットの認知度向上・観光活性化につながるように、HKB3社と学生チームが令和４年9月から製品化に向けた取り組みをスタートし令和5年２月に完成。2月14日に彦根市役所で記者発表をしました。

来季に向けて

企業連携プロジェクトの醍醐味は、なんと言ってもリアルな企業人との交流や指導を受けながら、企画を練り上げることにあります。企画の進め方、大学外との交渉の仕方、予算の考え方、マーケティングやネーミングなどを、座学で知識として学ぶだけでなく、企業人の経験則も加えて実践していく機会なのです。地域課題を材料に、その解決策を考えていくことも魅力ですし、今後も継続していきたいと考えています。

働き方探求プロジェクト2022秋
「協同労働とまちづくりの実践事例を学ぶ」

期　　間：2022/10/5－2023/1/25
履修者数：25名
担当教員：柴田 雅美

雇われないで働くことって、どういうこと？

この授業は、ワーカーズコープ・センター事業団　京滋事業本部からの協力講座として開講しました。授業を通して協同労働の考え方を学び、自身の働き方や生き方を考えるとともに、これからの地域社会のあり方や新しい地域経済のあり方も議論しました。

毎回の授業はゲストによる講話とディスカッションを行いました。オープニング講義として、協同総合研究所　事務局長の相良孝雄さんから「働くことの意味や若者の労働感と協同労働の市民化・社会化」のテーマでお話を伺いました。続いて、ワーカーズコープ・京滋事業本部長の田中紀代子さんからは「生きること・はたらくことを見つめ直す」ことについて、学生の身近な存在として滋賀大彦根地区生活協同組合の柳澤克哉さんからは「大学生協の取り組みと協同労働で働くと言うこと」について、ワーカーズコープ・京滋事業本部事務局次長の杉江圭一さんからは「ワーカーズコープの歴史や理念、労働者協同組合法の誕生等」について学びました。

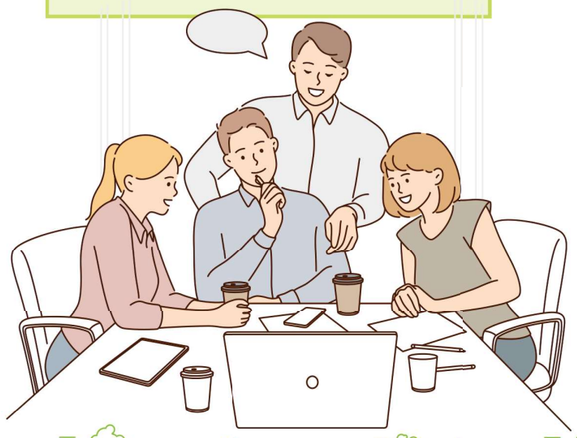
協同労働実践リーダーによる講話では、ワーカーズコープ・関西事業本部の崔亨珞さんとワーカーズコープ・京滋事業本部の菊池威臣さんからお話を伺い、まちづくりの事例として、滋賀大学卒業生でフリースクールを開いているNPO法人Sinceの門脇真斗さんからは「地域課題の解決をなりわいとする」ことについて、協同労働で働く若者からとしてワーカーズコープ・滋賀エリアで働く２人から「雇用労働との違いは何か」について、滋賀地方自治研究センター理事の中西大輔さんからは「地方自治の観点から見た地域社会のあり方」についてお話を伺いました。

講話編の最後に、菜の花プロジェクトネットワーク代表の藤井絢子さんをお招きし、「協同労働に対する地域の期待と新しい地域経済のあり方」について、現場に即した内容を学びました。

プログラムの後半は履修者による対話のグループワークを行いました。テーマは「そもそも協同労働とは何だろう？」「自分たちの暮らし方、働き方」をベースに、各自の夢や希望についてディスカッションをしました。

来季に向けて

今年度からスタートした協力講座で、全体を通じて、協同労働という雇われない働き方を主軸に学びました。その働き方は対話を重ね、地域課題の解決を仕事にしていくものです。学生たちはその働き方に関心を寄せる一方で、従来の企業での働き方と比較して、その違いに戸惑いも見せていました。学生らの感想を聞いていると、知識のインプットよりも、現場の実践の話とそれに基づく対話の機会がとてもよかったといいます。学生にとって働くことは未知で、必ずしも肯定的に捉えていません。その中で、じっくりと考え、発信し、さらに考えを広め、深めていく機会として充実させていきたいです。



地域活性化プロジェクト2022秋
「デジタル地域通貨を使って、地域資本主義を実践してみよう」

期　　間：2022/10/5－2023/1/25
履修者数：25名
担当教員：柴田 雅美

地域通貨でつながる見える化に挑戦しました

このプロジェクト科目は、びわ湖東北部地域連携協議会事業の一環として開講した、地域の諸課題をテーマに、主体的に考え実践する地域実践型PBL学習プログラムです。授業の目的を、あえて貨幣価値のないモノを使ったモノ・コトの流通が何を生み出すのか。その人の繋がりを可視化することで何が生まれるか、を仮説検証することにおきました。

授業では、鎌倉資本主義を提唱する（株）カヤックの柳澤大輔氏をゲストに迎え、社会、環境や文化といった地域の資本に着目した地域活性化の考え方と鎌倉での事例を学びました。２人の社員証を合わせないと購入できない飲み物の自販機の仕組みや、質より量を追求するカマコンのブレストイベントが印象に残りました。

続いて、カヤックの運営するデジタル地域通貨「まちのコイン」の仕組みと活用を学び、彦根市の地域通貨「彦」と滋賀県版デジタル地域通貨「ビワコ」の取り組みを学びました。後半には地域づくりの実証実験に参画し、「ビワコ」を使ってみた感想や改善点をアプリ内やSNS等で発信したユーザの獲得、県や市の企画や大学のサステナウィークと連携したイベントや周辺地域と地域通貨を紐づけたスポットの開拓に挑戦しました。

さらに、彦根市で開催された３９３９マルシェのイベントで20個以上の「ビワコ」の体験を考案したり、大学内での学生同士の繋がり作りになる100個以上の体験を考案しました。長浜市政策デザイン課さんの協力を得て、「ビワコ」のスポットを回る街歩きや、「ビワコ」を活用するためのイベントのブレストワークショップにも参加することができました。

履修した学生からは次のような感想がありました。「つながりを可視化する」というまちのコインの仕組みはすごく魅力的でした。体験を作ったり、使ってもらったりするという取り組みは、ネーミングや体験内容、広報手段の検討など多くの点でマーケティングの勉強になると思う。また、滋賀や彦根に新しく来る新入生や社会人にとって街の情報や大学の情報を入手したり、繋がりができるツールだと思う。

来季に向けて

授業を履修し、スポットとして体験活動を提案した学生からは、特に初めて滋賀や彦根にきた人に、街の情報を提供できるビワコが使えそうとか、自分の困りごとや助けを必要とするものを体験として企画すれば助けてくれる人との繋がりが生まれるんじゃないか、体験の内容やネーミングを考案するのはマーケティングの実践機会になるといった意見がありました。「ビワコ」活用プロジェクトとして続編を実施していきたいです。

社会人基礎力向上プロジェクト2022秋
「対人援助のプロから学ぶコミュニケーション・ファシリテーション、アセスメントのスキル」

期　　間：2022/10/17－2023/1/23
履修者数：14名
担当教員：柴田 雅美

「聞いて、考えて、伝えて」を意識何度も繰り返すことから

湖東地域障害者自立支援協議会による協力講座として恒例となったスキルアップ研修です。コミュニケーションスキル、ファシリテーション、課題解決力は、将来働く会社でも必要なスキルとして身につけたいものです。このようなスキルを、経済学部やデータサイエンス学部の学生に馴染みの少ない福祉職の方から学びます。授業を通じて、これらのスキル習得はもちろん、福祉への視野を広めてもらうことを大きなねらいとしています。

授業では、湖東地域障害者自立支援協議会から福祉の専門職の方に毎回講師として来学していただき、伝えるスキル、ファシリテーションスキル、課題解決スキルなどを学びました。例えば、聞くスキル・伝えるスキルでは、PCAGIPと言う対話による問題解決の手法を学び、実践しました。また、アセスメントスキルも実践しました。これは、対象をよく観察し、ニーズや人となりを推理し、対応を考えるものとして学びました。仮説を立てて検証するなど、会社の業務でもよく使われるものですが、使用する言葉は異なっても、スキルとしてはビジネスと福祉のボーダーはないのだということを理解できるものでした。

授業のまとめとして、ステラ・ヤングさんが感動ポルノについて語る動画や相模原の障害者施設殺傷事件を取り上げ、障害の捉え方と幸福追求をテーマに考え、議論しました。

授業全体を通じて、聞いて、伝えるスキルの大事さに改めて気づかされます。特に、目的をもって聞くことの大切さを実感するものでした。相手の人はどんな人か、どんな気分か、何を望んでいるかに注目し、それをもとに考える。想像する。類推する。仮説を立てる。次に、その仮説をもとに返事をしたり、他の人に伝えたり、提案したりというアクションをする。そしてまた聞いて考える。このプロセスを繰り返すことで相互に理解が深まります。そして、相互に大切にされているという人間関係も構築されていくことがはっきりとわかる授業プログラムになりました。

来季に向けて

対人コミュニケーションスキルのプログラムは、スキル自体の向上はもちろん、実際に授業で出会った学生同士の対人関係作りにも役立つものになっています。インプットが多い大学での学びの中で、インプットとアウトプットを繰り返す授業として今後も取り組んでいきたいと考えています。

不登校プロジェクト2022秋
「多様な学びのあり方を学び、考えよう」

期　　間：2022/10/4－2023/1/24
履修者数：16名
担当教員：柴田 雅美

なんのため？ 誰のための教育か

今年度もびわ湖東北部地域連携協議会事業の一環として授業プログラムを開講しました。このプロジェクトは不登校や隠れ不登校の増加がひとつの社会問題とも言われ、それに伴い公教育の在り方や公教育以外の選択肢としてフリースクールやオルタナティブスクールも注目されてきていることから、学生が自身の経験をベースにこれからの社会を考えるきっかけになることを期待しました。

授業では彦根市でフリースクール「てだのふあ」を運営する山下吉和さん、近江八幡市でフリースクール「ひとつぶてんとう園」を運営する西村静江さんをお招きして、不登校の子どもたちの状況や、どうしてフリースクールを始めたのか等を伺いました。彦根市教育委員会から学んだことは、彦根市でも全国の平均以上の不登校児童・生徒がいることと、教育行政としての取り組みです。行政の多くの取り組みに驚くとともに、それでもまだ不登校の子どもを学校に戻すのがよいと考える現場の先生もいることなど、実情を知ることができました。子どもたちの教育機会の確保をうたった「教育機会確保法（義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律）」についても学びました。

この授業プログラムでは、学校や教育の現状とこれからについて学んだ後、彦根総合高校の生徒会の生徒5名と先生を交えた哲学対話を行いました。テーマは「一体、なんのために勉強するのか」でしたが、自由やお金とは何かに発展したり、これからの夢や希望を語ったりしました。多様な学びの中で、自分で学ぶことを決め始めた子どもたちと、勉強はとにかくやるものだとなんの疑問もなく高校や大学に入った自分たちの比較などもあり、大変学びの深い授業プログラムになりました。

プログラムの後半には、愛知県でデモクラティックスクール「まんじぇ」を運営されている今井恭子さんと、スクールに通う子どもたちを招きました。学生らは子どもたちと一緒に彦根城に登り、その元気さに魅了されていましたが、いざ授業で大学の教室に入ると子どもたちはどんよりした雰囲気になりました。教室の何かが子どもたちに影響したようでした。

デモクラティックスクールは、民主的な学びの場作りを指向されています。教室の運営や学ぶ・遊ぶプログラムをスタッフと子どもたちが対等の立場で話し合って決めています。不登校になった子どもが学ぶフリースクールとは少し異なる、これから必要な教育の形であると思いました。

来季に向けて

不登校プロジェクトでは、履修する学生自らに不登校経験があったり、学校があわず中退をして高校卒業認定試験を経て大学進学したものなど、いわゆる普通の学びに違和感を感じてきた学生が最近多くなってきたと感じます。彼らの経験を通じて履修者が対話を重ね、自律的な自己肯定感を高めて欲しいし、その結果、彼らが社会で活躍できたり、多様性が認められる社会を実現していくことを期待して、今後もプログラムは継続していきたいと考えています。

認知症プロジェクト2022秋
－ 認知症をめぐる共生社会構築のためのプロジェクト

期　　間：2022/10/3－2023/1/23
履修者数：16名
担当教員：中野 桂

認知症。理解し取り組む

今年度のプロジェクト科目は16名の学生が履修し、①グループホームでおこなう縁日体験、②等身大パネルを用いた思い出写真館の開催、③認知症啓発チラシの作成とアンケート分析、④介護者に対するインタビュー動画の作成の4つのテーマでグループに分かれて取り組みました。

「縁日」の取り組みでは、グループホームの一室をお借りして縁日や昔の遊びなどを学生とともに行いました。昔ながらのイベントを行うことで回想法になるとともに、具体的に射的や金魚すくいなど手を動かすことで運動療法にもつながることを期待して行いました。グループホームの9名の入居者さんと、職員および学生4名が参加しました。

「思い出写真館」では、米原市のデイケア施設内に、昭和時代の地域の学校や出来事の写真を張った展示を行い、それに加えて当時のスターたちの写真を等身大パネルにして展示し、利用者さんに見ていただく取り組みをしました。当時の思い出や楽しそうに語り合う姿が印象的でした。

「認知症啓発チラシ」作成チームは、認知症にかかわる４枚のチラシを作成し、学内で配布しました。チラシにはQRコードがついていて、それを読み込むと自分が手にしたチラシ以外のチラシを見ることができ、それらのチラシの改善点などをアンケート形式で回答して頂きました。

「インタビュー動画」作成チームは、実際に介護に携わっている４名の方を取材し、３本の動画にまとめ、動画サイトにアップしました。日頃は伺うことのできない現場の方々の声を聴く貴重な機会となったとともに、今後もいろいろな人に動画を観ていただける機会を提供することができました。

これらのプロジェクトでは、米原市の社会福祉法人「ひだまり」と彦根市の特定非営利活動法人「びわ」の皆様に大変お世話になりました。

このプロジェクト科目は、認知症患者さんだけでなく、介護者やご家族の方々のQOLを向上させることにありますが、まずは若者を含め、多くの方が認知症について知るということがその基礎となると考えています。その意味で、この授業を通じて参加した学生は認知症への理解を深めたものと確信しています。

認知症患者数は数年後には750万人にも達するといわれています。「ヤングケアラー問題」や「ダブルケアラー問題」などは若者にとっても身近になりつつあります。大学において認知症についての教育プログラムを提供することの意義は、今後一層高まると思われます。

来季に向けて

今年も、新型コロナの第８波のさなかにもかかわらず、福祉施設の方々にご協力をいただいて、有意義なプロジェクトを行うことができました。来年度も引き続き取り組みを進め、「認知症とともに生きる共生社会」の構築を図っていきたいと考えています。

4 イベント

2022年11月21日～25日（5日間）

サステナウィーク２０２２

本学地域連携教育推進室が事務局になり、大学生と教職員による実行委員会主催のサステナウィークを開催しました。

サステナウィークとは、SDGsをはじめ持続可能な社会に向けて、さまざまなモノやコトについて、「〇〇の持続可能性」を考えてみる企画を１週間にわたり提供するイベントです。

キャンパスSDGsに取り組む人を増やすため、講演会・ワークショップ・上映会・体験・展示などの各種イベントを学生や教職員が実施しました。

講演会

働き方を考える-大企業で働くこと

滋賀大学卒業生で企業でマーケティングに関わってこられた越智道夫さんをお呼びしてお話していただきました。 ロレアル、ユニリーバ、資生堂、Lenovo等の大企業での経験に基づくお話をお聞きして就職への考えを深め、また、マーケティングを仕事にするために必要な力や文系職で必要な力についてのお話をしていただきました。

ミイダス株式会社 執行役員
越智 道夫　氏

生き方を考える
－井島 愛華さんとのトークセッション

摂食障害やうつなどの状況の中で世界を旅し克服した経験や日本を回った経験をお持ちの井島愛華さんをお呼びして、逆境の中で新しい世界に向かっていくことや、いろいろな世界に出ていくことに関してのトークセッションを行いました。

旅人、ヒーラー、ラテンダンサー
井島 愛華　氏

WS

びわこんどーむから始まる性教育

「びわこんどーむ」を知っていますか？
琵琶湖に生息するビワコオオナマズをモチーフにした、滋賀県オリジナルコンドームです。性教育先進県を自称する滋賀で、コンドームの必要性や多様性、「性教育」とこれからの「生きる教育」を考える体験会と、展示会を行いました。

滋賀人学経済学部3回生
中村 亮太　氏

ピンクマスクから想像するものは？

カナダ発祥のいじめ反対運動であるピンクシャツデーをモデルとし、多様性の尊重を呼びかける活動を行っている虎姫高校ピンクマスクデー実行委員会の方々とピンクマスクの意味を広める企画を一緒に考えました。

虎姫高校ピンクマスクデー
実行委員会

不登校を知る2022 ～秋のフォーラム～
学校に行きづらい子どもたちの育ちと学びを考える

滋賀県フリースクール等連絡協議会
びわ湖東北部地域連携協議会

映画「ゆめパのじかん」の鑑賞を通じて、これからの教育のカタチを考えました。また、県内不登校支援団体による「子どもが安心して過ごせる居場所とは？」をテーマにしたパネルディスカッションや、支援団体の紹介などを行いました。

探求＆実践SDGs 発表会

プロジェクト科目「探求・実践SDGs」の履修生が、SDGsを身近に感じられる企画として七輪を囲んで焼き芋を食べながら、ポスターセッションや哲学対話で語り合いました。焼き芋は滋賀大学で栽培したサツマイモをいただきました。

Art for sustainability

藍染でアップサイクル！

滋賀エコプロジェクト

自分の服を持ち込み、藍染体験ができる企画を実施しました。
手持ちの服が無い方にはサステナクローゼットで集まった服を使って体験していただきました。部分的に染めたり、絞って染めたり色鮮やかな藍色に染まりました。

使わなくなった服で作る裂き編みクリスマスリース

作業療法士兼ものづくり作家さんと一緒に、使用できなくなった学生服と着なくなった洋服の生地を裂いて糸にして編み込む、裂き編みのクリスマスリース作りを開催しました。
各々違った色合いで編み込み、可愛いリースが沢山できました。

Opull　高田 優　氏

サステナクローゼット

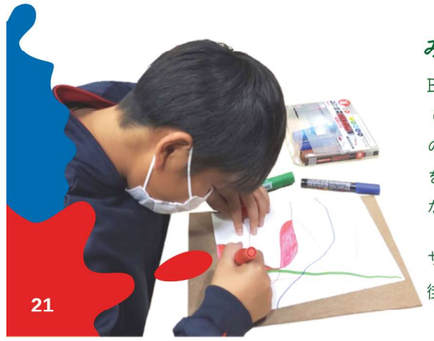
私たちが着ている服の製造・販売・廃棄に関する問題について考える機会にすることを目的とし、事前に回収した古着の譲渡会を行いました。学生や教職員の皆さんから沢山の服を寄付していただき、多くの学生に譲渡することができました。

滋賀大学１年生
吉田 果南瞳　氏

学生服を使ってチャームを作ろう！

学生服リユースショップさくらや彦根店に集まった学生服の中で、デザイン変更などで使用できなくなった制服・体操服の生地を使って、フラワーチャームやタッセルチャーム作りを開催しました。学校によってデザインがそれぞれ違うため、リボンやレースで組み合わせを変え、自分だけのオリジナルチャームが作れました。

学生服リユースショップさくらや彦根店
中西 裕子　氏



みんなのココロを色彩でつなげよう

B5画用紙に線を書いたり、色を塗ったりし、できた作品を1枚1枚壁に貼りました。一人一人の作品が集まり、つながって1枚の大きな作品を完成させることができました。一人では作れない唯一無二のアートになりました！

サステナウィーク実行委員会
×
街かどアート展実行委員会　コラボ開催

募集

学生服回収プロジェクト

使わなくなった学生服・体操服を寄付していただく回収プロジェクトとして回収ボックスを設置しました。さくらや彦根店さんに買い取ってただき買取金額を彦根市の子ども支援基金に寄付させていただきました。

滋賀大学サスティナビリティ研究会

体験

もったいないパントリー

食べられるのに捨てられてしまうことで生じる食品ロス。問題なく食べられる食品なのに捨てられてしまう食品を配布することで食品ロスの削減を目指す活動です。また、フードバンクひこねからいただいた食品を配布することで、フードバンクひこねの周知にもつながりました。また、前回とは違い、捨てられてしまう本の配布も行いました。

滋賀大学サスティナビリティ研究会

彦根市赤十字奉仕団,
ロケットストーブを体験しよう

ロケットストーブを使った「IZAMESHI」の炊き出しパフォーマンスを2日間にわたって行いました。多くの学生に提供することができ彦根市赤十字奉仕団のボランティア活動の啓発にもつながりました。

彦根市赤十字奉仕団

展示

街かどアート　滋賀大交差展

湖東地域を中心とした障害者アートの展示会「街かどアート」が滋賀大学にやって来ました。自由に見ていただけるように彦根キャンパスの各校舎内に絵画や造形物が展示されました。また、みんなで作るアートワークショップ「みんなのココロを色彩でつなげよう」も同時開催しました。

街かどアート展実行委員会
街かどアート滋賀大交差展実行委員会

People's Pantry・みんなの食品庫

People's Pantry
もったいないをありがとうに

食品ロスの削減という大きな目標と べ物があるという小さな安心を目指して

令和4年度も地域連携教育推進室内にフードパントリーを常設し、学生らに食料配布を行いました。

配布する食料は、地域のフードバンク彦根の活動に学生らがボランティアとして参加し、定期的に食品庫で配布する食材の供給を受けたり、大学の災害時備蓄品で期限が間近になったり、期限が切れてしまった水やアルファ化米などの食料をフードパントリーでいただいています。

また、令和５年１月には寒冷により彦根市内で水道管の破裂がみられました。学生の中にも破裂した家庭があり、応急的な水の必要に対応するため、在庫していたミネラルウォーターを提供することもありました。

食品提供回数（寄付）：25回
食品数/品目数：2344品 / 24 品目
利用者数：延666回
令和４年４月１日～令和５年２月末時点（継続中）

フードパントリーの運営は、学生団体「滋賀大学サスティナビリティ研究会」のメンバーが主になり安定した活動を展開しています。そのメンバーが大学近隣の彦根市北デイサービスセンターさんと関わりを持ったことがきっかけで、デイサービスの利用者さんが古新聞を使って制作した紙バッグを定期的にいただけることになりました。

いただいた紙バッグはパントリーを利用する学生らが使わせてもらっています。デイサービスの利用者さんからは、紙バックを届けに大学に来るのが楽しみの一つになると仰っていました。

来季に向けて

大学の中で食品ロス削減や必要な人への小さな安心の提供にもなる「みんなの食品庫」と、地域と大学や学生との接点としての「みんなの食品庫」。People's Pantry みんなの食品庫は、地味で小さな取り組みですが、大きな存在意義がある大事な取り組みとして今後も継続したいものです。

5 学生の自主活動

PICK UP !

滋賀大学サスティナビリティ研究会

私たちサスティナビリティ研究会は大学生と地域の方々で社会問題に取り組んだり考えたりしている有志の団体です。
今年は、フードバンクひこねや地域で野菜を育てている方からロスとなってしまう食品をいただいて学生に配布する「もったいないパントリー」や滋賀大学周辺に住んでいる高齢の方と滋賀大学校内やその周辺を散歩する「滋賀大学歩こう会」を行いました。

また、サステナウィーク2022では、彦根市赤十字奉仕団の方々と協力して、ロケットストーブを使用して地域の方からいただいたお野菜を使用したお味噌汁を作ったり、おにぎりを作ったりして大学生に配布しました。

また、滋賀大学歩こう会は今年から新しく始めたサスティナビリティ研究会の企画で、地域の方々に滋賀大学の中がどうなっているかを知ってもらうことで、滋賀大学と地域の方の距離を近づけたり、散歩による健康推進を行なったりすることを目指して活動を行いました。

加えて今年は学外での活動として、近隣の中学校や大学外の方に向けた大学生の生活や私たちの活動に関わるお話も行いました。今後もより一層地域と関わる活動を行っていきます。

SHIGA UNIVERSITY SUSTAINABILITY LABORATORY
Since:2021

地域連携教育推進室は、これらの経験と大学での学びが織り交ざり、学生自身はもとより、地域や大学にたくさんの創発が生まれることを期待しています。
地域の企業や団体、ボランティア活動には、大学だけでは得ることができない社会課題との遭遇や人間関係への気づきなど貴重な学びの機会があります。

6 新聞掲載

2022

「人形劇から学ぶ企画構成力・表現力」プロジェクトのの成果発表会として人形劇公演を開催

市内ボランティア団体のHot Hot ～ほどほど～と人形劇サークル我楽多の協力のもと、彦根市北老人福祉センターハピネスで開催され、子どもと保護者ら23人の参加がありました。短い期間での企画・制作、そしてリハーサルを重ねて見事に演じ切りました。

「滋賀大学サスティナビリティ研究会」フードロスの取組み

学生たちは食品を配布しながらフードバンクについて説明することで、食材の配布と共に食品生産工程で生じる食品ロスとなるものの中には食べられるものがあることを伝え、多くの学生・教職員にフードロス問題についての理解を深めてもらうことになりました。

学生らしい着眼点で自助具を開発 完成発表会を開催

モノづくりプロジェクト2022春「思わず欲しくなる自助具を作ろう」の完成発表会を彦根市北老人福祉センターハピネスにて開催しました。製品紹介に加え、苦労や工夫したところ、コストのほか、「認知症になってきている自分のおばあちゃんに役立てたいと思い制作しました」など制作への想いも語りました。

高校生の夢を実現！ HKB企業連携プロジェクト

2021年は、彦根の思い出エピソードや思い出の場所が沢山つまった「ひこね思い出フォトブック」が最優秀に選ばれました。

2022年は彦根市に伝わる「彦根かるた」の絵札を使って地元の歴史や景観を紹介する「彦根かるたマップ」が最優秀に選ばれました。

「市議会議員インターンシップ」 彦根市議会や議員の具体的な活動を体験し 地方自治を学ぶ

彦根市議会と連携協定を結び、公務員とは異なる視点で市政を学びました。彦根市議会を訪問し議会について学ぶとともに議場の議員席に着席しインターンシップへの意気込みを語りました。

フードロス削減！ 小松菜ソフトを販売

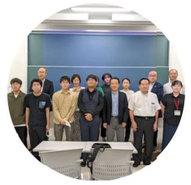
プロジェクト型インターンシップにて本来廃棄される規格外の小松菜に着目し、「小松菜ソフト」を企画し販売を行いました。

7 協力企業・団体の皆様

2022年度も多数の企業・団体の皆様にご協力をいただき、ありがとうございました。
おかげをもちまして、地域課題をテーマにした授業の実施や学生の地域活動やボランティア活動の貴重な機会になりましたこと、お礼申し上げます。このトピックでは、ご協力いただきました取り組みの一部を紹介しています。滋賀大学は、地域のなかの大学として地域社会の一端を担えますよう、大学・学生ともども取り組んでまいります。引き続きのご支援とご協力をお願いいたします。

平和堂・キリンビール・ブリヂストン

HKB（H＝平和堂、K＝キリン、B＝ブリヂストン）による「彦根発！笑顔いっぱいプロジェクト」の一環で、高校生の夢を実現する企画をプロジェクト科目として実施しました。



彦根市議会事務局

2017 年度の経済学部との連携協定締結から、今年度は夏季のインターンシッププログラムを提供してい ただきました。

滋賀県湖東地域障害者自立支援協議会

福祉について大学生に身近なものとして捉え、考えてもらう機会として協力講座を開講していただきました。2019 年度から連携 しています。

滋賀県フリースクール等連絡協議会
びわ湖東北部地域連携協議会

不登校フォーラムの共催や居場所情報の提供で連携し、
不登校への理解や子どもたちの居場所づくりに努めました。

彦根市子育て支援課
滋賀県湖東健康福祉事務所

ひとり親家庭の子ども支援活動や滋賀県の行う生活困窮世帯の子どもの学習・生活向上支援事業に大学生がボランティアとして参加し、学習支援を行っています。

彦根市子ども若者会議

不登校プロジェクトのひこねの居場所事業では、会議のメンバーとしてとして情報交換をしています。

彦根市社会福祉協議会・ボランティアセンター
ひこね市民活動センター

大学生が地域で活動する際、活動機会を提供していただいたり、
地域住民とのかけはしになってくださいました。
毎月のボランティア・市民活動相談を実施していただきました。

フードバンクひこね
フードパントリーひこね

大学生がボランティとして定例の食料配布活動に参加したり、大学の People's Pantry・みんなの食品庫への食材提供をいただいています。

（社福）ひだまり・
彦根市福祉保健部・NPO法人びわ

認知症プロジェクトで学生の活動機会の提供や講座の実施、授業への助言をし ていただきました。

かめのこ子ども食堂

子どもたちへの食堂運営にボランティアとして学生を受入れいただいたり、コロナ禍での孤立しがちだった学生にとって、人と関われる場所を提供していただきました。

彦根市北デイサービスセンター

みんなの食品庫で使用する新聞紙パックを提供いただいたり、学生グループが企画した高齢者の学内散策に協力していただきました。

人形劇サークル我楽多
Hot Hot－ほどほど

プロジェクト科目に協力していただき、人形劇の企画・実演の指導をしていただいたり、公演の機会をいただきました。

ひこね自助具開発工房

プロジェクト科目に協力していただき、モノづくりの考え方や実際の工具使用なども指導していただきました。

ワーカーズコープ・センター事業団
京滋事業本部

プロジェクト科目に協力講座として講師派遣をしていただき、学生の働き方・生き方への助言をしていただきました。

デモクラティックスクールまんじぇ
フリースクール てだのふあ
ひとつぶてんとう園

不登校プロジェクトの授業では、多様な教育現場として活動を紹介していただき、子どもたちの実情を学びました。

街かどアート展実行委員会

大学内でアート展「街かどアート滋賀大交差展」を企画していただきました。

地域連携

SHIGA UNIVERSITY

【地域連携教育推進委員】

竹中 厚雄 / 柴田 雅美 / 真鍋 晶子 / 横山 幸司 / 榎本 雅之 / 田村 あずみ / 入江 直樹 / 土田 梨絵（事務担当）

国立大学法人 滋賀大学 経済学部　地域連携教育推進室
2022年度　活動報告書　令和5年３月３１日発行
発行　滋賀大学経済学部　地域連携教育推進室

お問合せ：地域連携教育推進室　〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1　Tel.0749-27-1348

地域連携教育推進室
LINE QRコード ↓

地域連携教育推進室
HP QRコード ↓